

## 情緒障害の発生予防にかかわる家庭養育環境のあり方に関する研究

主任研究者 石井哲夫

はじめに

本プロジェクト研究は、現代社会において多発している子どもの情緒障害や問題行動への正しい理解を深めるとともに、その発生を減少せしめ、かつ発生予防対策としての方策を求めめるために行われたものである。今年度研究は、その第I報である。

我々は前記の目的のため、その基礎的な仮説をたててみた。すなわち情緒障害と問題行動にかかわる状態像と学問的な整理が十分でないことから、まずこれを明らかにすること。更に情緒障害の発生原因の有力なものとして家庭生活（狭義には親子関係）に焦点をあててみる。

情緒障害は従来から心因性の障害として、何らかの器質的障害によるものとは区別されてきただけに、その対策についても医学的な定説を見出し難く、主として心理学の立場から環境因子としての原因を求めていくということが行われていたようである。しかもその多くが、短絡的な因果関係を求めることに終っていたようである。今回家庭生活との関係を考えるにあたって、改めて家族関係を総合的に把握、かつこれを治療的な観点から臨床的な実践の中で考究していくべき必要性を感じたのである。

即ち既存のファミリークリニックを調査し、かつ家族療法のテクニックを学習していくことからはじめ、そしてそれを、本研究所の相談活動に積極的にとりいれながら、情緒障害児を診断し併せて、その家庭生活や家族関係にかかわる治療を行うことによって、情緒障害や問題行動の発生予防についての知見を得ることが出来るものと考えたのである。

従って初年度として、今年度の研究計画を次のようにたててみた。

I 情緒障害の一般化された事象として「いじめ」に関する実態を調査し、家庭環境との関連を検討し考察する。

II 家族療法とファミリークリニックに関する理解を深めるための文献収集と実際に行っているクリニックを見学する。併せて家族療法についての臨床、実践的な検討を行う。

更に本研究と併行して、日本総合愛育研究所内に、情緒障害児、問題行動児にかかわる臨床相談、治療のシステム化をはかるために、従来から行って来た発達相談と心理治療の二部門の統合を行うことを目指し、かつそこに家族治療の臨床実践を行う準備をしたいと考えた。すなわち、前述の如く本研究の実施によって、本研究所の臨床実践活動の活性化をはかろうとするものである。

本研究は、厚生省の心身障害研究の一部を担うものである。

## 家庭環境（家庭の養育機能・親子関係等）と「いじめ」の関連性に関する研究

研究第6部 権平俊子  
研究第5部 望月武子  
共同研究者 山本清恵（母子愛育会心理治療室）  
吉川政夫（母子愛育会心理治療室）  
村上摩利子（日本福祉教育専門学校）

### 1. 目的

本研究は、家庭の養育機能や親子関係等のあり方がいじめの加害経験や被害経験の発生要因の1つとして働いているのではないかという考え方に立っている。以下においては、主として家庭の養育環境といじめとの間に何らかの関連が存在するか否かを検討することを研究の目的とする。

なお、本研究では、「いじめ」を、いじめっ子といじめられっ子あるいはそれを見ている子という対人関係上の絡みに発生する、フォーマルならびにインフォーマルな社会集団内の攻撃行動とみなす。以下でとりあげる「いじめっ子」とは、意識的に弱い立場にある仲間に対して一方的に精神的あるいは身体的苦痛を加える子であり、「いじめられっ子」とは、強い立場にある仲間から一方的に精神的あるいは身体的苦痛を受けることによって、被害をこおむったり、被害感情を抱く子のことである。ところで、「いじめ」と「けんか」には違いが認められる。「けんか」の場合は、対立する当事者同志が互いに相手になる意志をもってぶつかり合うが、「いじめ」の場合には、強い立場の者が一方的に弱い立場の者を攻撃する行為であり、その点に違いが認められる。

### 2. 方法

質問紙調査法を用いて、中学生とその母親を対象にした調査を実施した。具体的な方法は以下の通りである。

- (1) 調査期間  
昭和61年1月14日～28日
- (2) 調査対象

都内の私立女子中学校に在籍する1年生から3年生までの女子中学生221名とその母親221名。

#### (3) 調査手続

在籍する生徒全員に調査票（表題「日常生活に関する調査」生徒用および母親用）を配布し、生徒本人と母親に回答を依頼した。回答は無記名であり、回収については生徒と母親が互いに干渉し合わないよう配慮した。

#### (4) 回収結果

生徒とその母親それぞれから回答が得られた有効回収ケース数は202、有効回収率は91.4%である。その内訳は、1年生79ケース（有効回収ケース数の39.1%）、2年生78ケース（38.6%）、3年生43ケース（21.3%）、不明2ケース（1.0%）である。

なお、本研究の一環として、東京都内の私立中学校、高校の生活指導、生徒指導担当教員100名を対象に、「いじめ」問題に対する教育現場の取り組み方と考え方を探索する「いじめっ子・いじめられっ子に関する調査」（教員調査）を実施した。その結果については、「日常生活に関する調査」の結果とからめて適宜紹介する。

### 3. 結果と考察

#### 3-1 いじめの実態といじめっ子・いじめられっ子の性格特徴

- (1) いじめた経験・いじめられた経験  
「あなたは、いじめたり、いじめられたりしたことがありますか。」の質問に対する回答結果は表1に示されている。

表1 いじめた経験・いじめられた経験

(%)

いじめた経験 いじめられた経験	有	無	無答・誤答	計
有	54 (60.7) (64.3)	25 (25.3) (29.7)	5 (35.7) (6.0)	84 (41.6) (100.0)
無	33 (37.1) (28.9)	74 (74.7) (64.9)	7 (50.0) (6.2)	114 (56.4) (100.0)
無答・誤答	2 (2.2) (50.0)	0 (0.0) (0.0)	2 (14.3) (50.0)	4 (2.0) (100.0)
計	89 (100.0) (44.0)	99 (100.0) (49.0)	14 (100.0) (7.0)	202 (100.0) (100.0)

① いじめた経験あり44%，なし49%である。いじめた経験の有無の割合に有意な差はみられない。他方、いじめられた経験では、あり41.6%，なし56.4%で、いじめられた経験なしの割合は、ありに比べて有意に多い(CR = 2.07,  $p < 0.05$ )。

大阪市立大学が実施した調査(1985)では、中学生のいじめた経験あり、いじめられた経験ありはともに44%，東京都の公立学校における児童・生徒の「いじめ」の実態調査(1985)の中学生のいじめの割合は36.7%を示しており、本調査の結果と近似していることから、中学生のいじめ、いじめられ経験は40%程度の割合にあると言えよう。

② 次に、表1から、いじめ、いじめられ経験を各生徒ごとにタイプ分けすると、いじめた経験といじめられた経験の両方をもつ生徒(いじめ・いじめられっ子)は26.7%である。反対に、両方の経験のない生徒(いじめ・いじめられに直接かかわらない無関係な子)の割合は36.6%である。また、いじめた経験のみをもつ生徒(いじめっ子)は16.3%，いじめられた経験のみをもつ生徒(いじめられっ子)は12.3%である。以上4タイプの割合の差は統計的に有意であり( $\chi^2 = 31.3$ ,  $df = 3$ ,  $p < 0.001$ )、一方的にいじめたり、いじめられたりする生徒は少なく、同一の生徒が両経験をもつケースやいじめ・いじめられに直接かかわらない生徒の方が多くことがわかる。

以上の結果から、何らかのかたちでいじめに直接関係した経験をもつ生徒は全体のほぼ3分の2を占めている。この結果は、先の2つの調査および大阪府・福井県の小中学生を対象とした人間教育研究会の調査(1983)の結果とまったく一致している。

(2) いじめ方といじめられ方

① 主ないじめ方の種類を件数の多いものから順に5つあげると以下のようである。

- 1) みんなで無視する (36.8%)

- 2) 悪口を言う (16.2%)
- 3) 本人の弱点や欠点にわざと触れる (11.8%)
- 4) 命令されていじめる (7.4%)
- 5) 机や持ち物等に対する落書き (5.9%)

② 同様に主ないじめられ方の種類は以下のようである。

- 1) みんなに無視される (29.2%)
- 2) いやがらせの電話 (10.6%)
- 3) 持ち物がなくなったり、壊されたりする (10.2%)
- 4) 悪口を言う (10.1%)
- 5) 本人の弱点や欠点にわざと触れる (8.3%)

③ 今日のいじめはその手段、方法が陰湿で執ようとなっている(いじめの陰湿化、密室化)と同時に、多数で1人ないし数人をいじめる(いじめの集団化)を特徴とする。いじめ方およびいじめられ方の結果の中で断然多い「みんなが無視する」は、外部からの可視性の高い暴力などの物理的いじめ行為を伴わないため、教師や親の目が届かず、見えにくいいじめ方である。また、この種の内いじめは、いじめられる側にとっては、加害者が複数から多数にわたる、具体的な被害の証明ができないなどの理由から対応がとりにくく、いじめられる生徒の心を深く傷つける「非人間的な」いじめ方である。また、「悪口を言う」、「本人の欠点や弱点にわざと触れる」など、いわゆる「言葉による暴力」を内容とするいじめも多く、他人の心の痛みに対する思いやりを欠いた行為と言えよう。ただ、これら2つの手口はいじめる側の順位としては2位、3位と高いが、いじめられる側は4位、5位となっており、いじめられ側の心理的ダメージは相対的に低い。それに対して、いじめられる側にとって心理的ダメージの大きいのは「いやがらせの電話」である。このいじめは、面と向かって悪口をあびせられるより手口がいやらしく屈折しており、何か底知れない無気味さと陰湿さをいじめられる側は感じるのであろう。

総じて、調査対象者が女子中学生のためもあってか、

身体的な苦痛を伴ういじめ方はほとんどなく、他人の心への思いやりに欠ける心理的な苦痛を伴う「心理的」いじめ方が圧倒的に多い。

(3) いじめっ子・いじめられっ子の性格特徴

① いじめっ子の性格特徴を生徒、母親、教員にうかがったところ、主たる結果は図1のようである。

生徒の回答では、いじめた経験がある群（以下いじめ有群）、無群、いじめられた経験がある群（以下いじめられ有群）、無群の各群ともに、いじめっ子の性格特徴として評価している項目はほとんど同じで、「自己中心的」、「思いやりにない」、「気が強い」、「短気」、「乱暴」、「支配的」の順に多い。

母親、教員もともに1位、2位として、「自己中心的」、「思いやりにない」をあげている点は生徒の見方と一致している。その他の性格特徴の項目についても、生徒の評価と母親、教員の評価に大きな違いはない。ただ、母親では「自制心がない」、「不満が多い」、「熱中するものがない」を指摘した割合が多い点が目立っている。教員では、「乱暴」、「短気」を指摘した割合が多いのが特徴である。

② 先のいじめ方・いじめられ方の項で、他人への思いやりに欠いた自己中心的ないじめが多いこと（いじめの非人間化）を指摘したが、いじめっ子の性格特徴の評価にその点が如実にあらわれており、自己中心的で思いやりのなさが強調されている。自分の気に入らない者や異質な者をあからさまに排斥しようとする気持ちが強く、自分の感情のままに動く傾向が著しい。いじめの加害者はいじめることによって、他人の不幸や悲しみを犠牲にした自己中心的な欲求の満足を求め、自己の心理的安定

をはかろうとしている。そして、基本的には、弱い立場にある者が、いじめられてどんな気持ちでいるかを感じとる共感能力の欠乏がいじめっ子の性格特徴として母親、教員に共通に指摘されている。これらのいじめっ子の性格特徴の指摘の背景には、現代の子どもたちの人格特徴である人格の未熟性、すなわち、欲求の短絡的充足傾向、欲求不満耐性の欠如、自己愛パーソナリティの突出、未学習による対人関係能力の稚拙さが推察できよう。

③ 一方、いじめられっ子の主な性格特徴の評価は図2のようである。

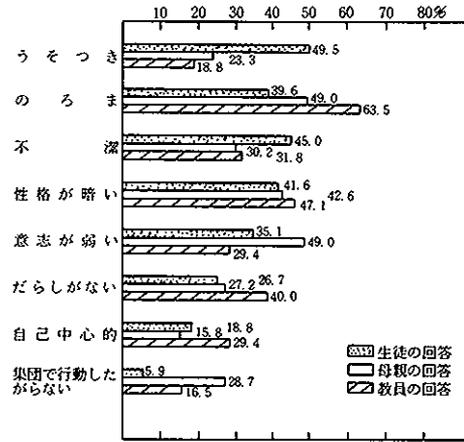


図2 いじめられっ子の性格特徴

生徒は、いじめられっ子の性格特徴として、いじめ、いじめられの各群共通に、「うそつき」、「不潔」、「性格が暗い」、「のろま」、「意志が弱い」等の順で多くあげている。中学生年齢の子どもたちの善悪の判断基準に照らすと、ちょっとした軽い約束を守らないとか口で言ったことと実際の行動がズレているとひどく悪いことをしたように感じ、それらのふるまいを「うそつき」とみなす傾向がある。大人の目からみると重大視されないような「うそつき」が、子どもの世界ではいじめられる大きな原因になっていることを結果は示している。また、「のろま」、「不潔」がいじめられっ子の性格特徴としてあげられている点は、自分たちと違うはずれた子、異質な子、弱い立場の子をあからさまに邪魔者扱いするいじめの心理が働いていることを示している。のろま、不潔な子はその標的にされていることを結果は示している。そして、「性格が暗い」、「意志が弱い」性格の者も、ふざげやいじめの攻撃をかわす技術、たとえば、いじめの言葉をいなす、かわす、ウィット・ユーモアをもって対処する等がないために、結果としていじめられることが多いと言えよう。

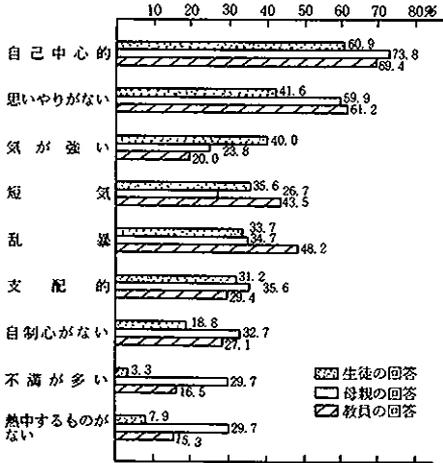


図1 いじめっ子の性格特徴

すなわち、対人関係能力や自立心の未発達がいじめられる原因となっている。

④ 母親、教員の指摘する性格特徴の項目は生徒のそれとはほぼ一致しているが、「うそつき」の割合が少ないことでは母親、教員は一致している。ただ母親は、「集団で行動したがない」項目の割合が生徒、教員と比べて大きい。それに対して、教員は、「のろま」を特に強調し、「性格が暗い」、「だらしが無い」、「自己中心的」などの割合が大きいのが特徴的である。教員は、日常生活を生きる能力（基本的生活習慣、社会成熟度、自律心等）の訓練不足をいじめられる原因としてあげていることが結果からうかがわれる。

(4) 性格・行動特徴についての生徒本人の自己評価  
われわれはいじめの問題を家庭養育機能との関係で考えようとしているのだが、ここではその序として、いじめをする子、いじめられる子の性格・行動特徴、或は近年の中学生気質について考察する。

教員の調査により、いじめっ子の特徴から、

- (a) 自分は自己中心的だと思う——自己中心的でないと思う。
  - (b) まわりの人に対して思いやりにくいと思う——思いやりがあると思う。
  - (c) ちょっとしたことですぐカッとなる——どんなことにも腹を立てない。
  - (d) 怒った時は乱暴な言葉使いや行動をする——どんな時でも乱暴ではない。
- また、いじめられっ子の特徴から、
- (a) 自分の性格は暗い——明朗である。
  - (b) 不潔でも気にならない——きれい好き。
  - (c) 物事をするのが人に比べてのろい——早い。

以上の7系列についての5段階自己評価と、同じくそ

の母親の評価を得た。結果は図3、表2に示す。

① 平均を比べると僅差ではあるが、いじめ経験に関しては、あり群の方にいじめっ子の特徴的傾向が多くみられる。

② いじめられ特徴の「性格が暗い」、「不潔が気にならない」の2系列は、いじめられ経験に関しては、なし群の方がより明朗であり、あり群の方がよりきれい好きであることを示し、母親の評価でも同様な傾向がみられる。しかし、この2系列については殆んど生徒の自己評価及び母親の評価が、「明朗」、「きれい好き」の側に偏っていて、健康的印象を受ける。

③ 「のろい」については、いじめられ経験のあり群は僅かにのろまであり、いじめ経験あり群は、どちらかと云えば動作が早い方である。いじめっ子は母親の評価でも、比較的早いという傾向を示している。

④ 母親の評価では、「不潔——きれい好き」以外の6系列については、どれも生徒の自己評価を上まわっている。過保護のため甘い評価をしているのか、放任で子どもをよく見ていないかのどちらかであろう。

⑤ いじめっ子の4つの特徴は、平均を比べると、いじめ・いじめられについて、あり群の方が、それぞれなし群より多くの生徒にあらわれている。母親の評価でも同様である。これについては、図3に示す帯グラフの5段階分布で、全体的傾向としていじめ左側といじめられ右側がほぼ対称形であることからわかる。

⑥ また、この図によれば、「非常に……」の評価1と5については、いじめられっ子特徴の「のろま」、「性格が暗い」には、両経験をとおして、あり・なし両群にほぼ妥当な傾向がみられる。しかし、いじめっ子特徴の「思いやり」や「腹立ちの分布」は、評価1と5では両経験のあり、なし群が逆転傾向を示している。

表2 性格、行動の自己及び母親の評定（群別平均）

1. いじめ経験別 2. いじめられ経験別 3. 母親（いじめ別） 4. 母親（いじめられ別）

性格、行動特徴 (1↔5)	群別		1. いじめ		2. いじめられ		3. 母親(いじめ)		4. 母親(いじめられ)	
	あり	なし	あり	なし	あり	なし	あり	なし	あり	なし
自己中心的である——ない	3.0	3.3	3.0	3.3	3.5	3.5	3.4	3.6		
思いやりにくい——ある	3.5	3.6	3.4	3.7*	3.9	4.1	3.9	4.1		
すぐかっとなる——腹をたてない	2.5	2.7**	2.6	2.7	2.8	3.2**	2.9	3.2*		
性格が暗い——明朗	3.9	3.9	3.8	3.9	4.3	4.1	4.0	4.2		
不潔的——きれい好き	4.1	4.1	4.1	4.0	3.9	3.8	3.9	3.8*		
のろい——早い	3.2	3.1	3.0	3.1	3.4	3.1*	3.2	3.2		
乱暴——乱暴でない	2.5	2.7	2.4	2.8**	2.8	2.9	2.9	2.9		

(注) コクラン・コックス法で\*\* $p < 0.05$ , \*\*\* $p < 0.01$ で有意差が認められる。

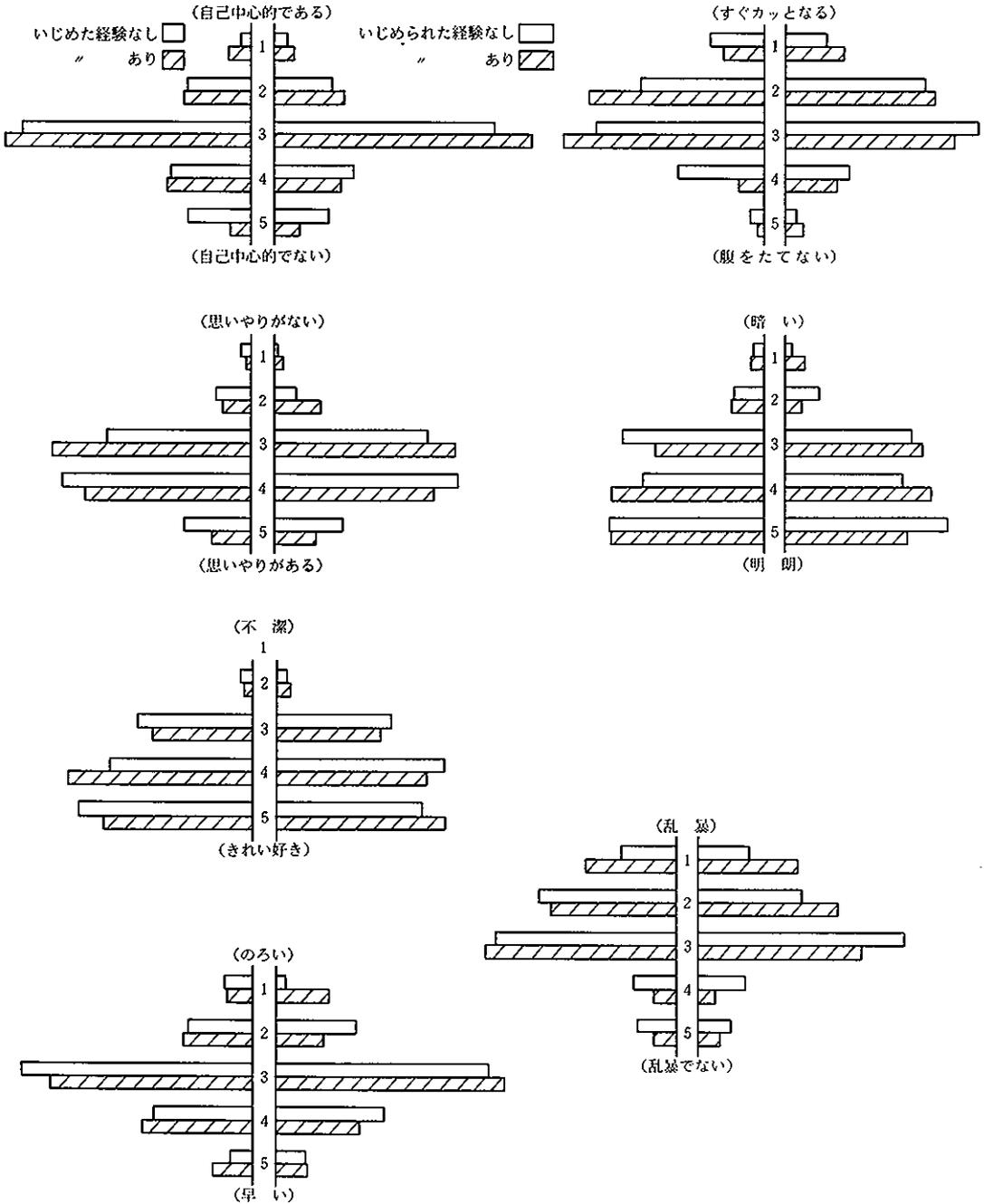


図3 いじめ・いじめられ経験別分布

⑦ そこで、いじめ・いじめられ経験（一方或は両方）のある生徒と、どちらの経験もない生徒の2つの群に分けて、その自己評価の平均を比べてみる。表3のとおりである。いじめっ子特徴について、あり群はなし群よりその特徴的傾向を示している。即ち、いじめっ子の特徴はいじめっ子だけでなく、実はいじめを生じる生徒の特徴であること、いじめられっ子の特徴は、いじめられっ子に限定されたものでなく、調査対象の生徒のごく一般的なものであるということである。

表3 いじめ・いじめられ経験が全くない群とある群の平均の比較

群 別	いじめ或は いじめられ 両方あり 一方い 一方い	いじめなし いじめられ 両方あり 一方い 一方い
性格・行動特徴 (1↔5)		
自己中心的である——ない	3.0	3.4*
思いやりがなく——ある	3.5	3.7
すぐカッとなる——腹をたてない	2.6	2.7
性格が暗い——明朗	3.9	3.9
不潔的——きれい好き	4.1	4.1
のろい——早い	3.1	3.1
乱暴——乱暴でない	2.5	2.8*

(注) コクラン・コックス法で\*… $p < 0.05$ で有意差が認められる

以上の結果から考察されることは、いじめっ子もいじめられっ子も共通して云えることは、自己中心的で思いやりがなく、ちょっとしたことにすぐ腹をたてる子だということである。従っていじめの原因はその場、その時に起った事件ではなく、生徒達ひとりひとりの内面に潜んでいるのではないだろうか。日頃情緒が不安定であるので、或る生徒は或時その解消をはかり、いじめ行動を起し、いじめっ子になり、また他の場合は内向し、他の生徒をいらだたせ、いじめられっ子になってしまう。そして、いじめが行動化する時のきっかけは、いじめられっ子の性格が暗いとか、のろまとか、不潔とかである。しかもそれは必ずしも客観的事実であるというより、言いがかりである場合が多いだろう。

(5) 文章完成法\* (SCT) による生徒の内面表現

以下の5つの事柄につき生徒の記述を類形化し、考察した。(集計結果は頁数に限りがあるので省く)

(1) 「学校へ行くと……」と「家へ帰ると……」

学校は楽しい所と記述した生徒は2/3以上あり、特にいじめ・いじめられの経験の全くない生徒に多い(91.5

%)。その殆んどが友達がいるからである。また1/3弱の生徒は学校に否定的反応を示している。特にいじめ・いじめられ両方ありの生徒の半数以上が「勉強すると思うと嫌だけど、友達がいるから楽しい」とアンビバレンツな記述をしている。

では「家」についてはどうだろうか。「家へ帰るとホッとできる」、「テレビなど見てゆっくりできる」など緊張を弛めて、自分勝手な自由がある場と考えている。特にいじめられあり群に多く60.5%がこういった記述をしている。

思春期は親への依存から外界へ、特に友人との結びつきを求め、自分の感情や要求を友人にぶつけていく時期である。それだけに友人関係の期待も大きい、また抑圧も当然生れてくるわけで、家は休息所となるのだろう。

「困った事や悩み事があったら誰に相談しますか」の設問では、いじめあり群の多くは、1位に「学校の友達」(42%)、2位に「母」(25%)としているのに対して、いじめられあり群は1位に「学校の友達」(36%)と、「母」(35%)を同列で選んでおり、いじめられっ子は成長しきれずに母子分離不安の状態を残しているという見方もできる。

(2) 「嬉しいことがあると……」、「おもしろくない気分のは……」、「私はずかしいと思うのは……」

生徒達の情緒面については、まず「嬉しいことがあると顔に出てしまう」、「人に話したくなる」などが殆んどであるが、いじめられあり、いじめなしの生徒は「ひとりですべて思っている」など、どちらかと云えば控え目な記述が目立つ。

反対に「おもしろくない気分のはムツとしている」、「目の前の人をなぐりたくなる」などの不満や攻撃性が多く、特にいじめ・いじめられの両方ありの生徒に多く(35.3%)、いじめなく、いじめられありの生徒には比較的少ない(24.0%)。反対に「マンガを読んで気ばらしをする」などの気分転換の方法をとるのは、いじめ・いじめられ両方ありの生徒に少く(25.5%)。いじめなし、いじめられありの生徒に多い(40.0%)。

また、「私はずかしいと思うのは人の前でこけたり、失敗すること」の類が多く、いじめあり、いじめられなしの生徒に最も多く、1/3が失敗恐怖を持っている。それに反していじめ・いじめられ両方ありの生徒は「足が太い」、「ちょっと幼稚な性格」など容姿や性格にこだわっている記述が1/3みられ、比較的多い。

\*当所紀要第21集「年少非行に関する研究(第5報)」160頁を参照

(6) 成長期の体験

乳幼時、小学生時の生徒の気質についての母親への設問で、いじめられありの生徒には小学生時に「手のかかった子」の指摘が多く(71%),転校もいじめられありの生徒の半数は経験している。こういった幼少時の経過もまた、いじめられる必然性を生み出しているのではなからうか。

生徒本人については、本調査でみる限り、一般的に言われているいじめっ子の性格・行動特徴は、いじめ・いじめられの両方ない生徒に殆んどみられないが、どちらかと言えば、その他の生徒に多い。いじめられっ子の特徴を持つ生徒は稀であるが、いじめられっ子の母子関係にやや疑点が感じられる。

3-2 家族・家庭・親といじめ

(1) 家族構成といじめ

① 調査対象者の家族構成は、「夫婦と子ども」の核家族が66.8%,「夫婦と子どもと祖父母など」からなる家族が24.3%,その他7.4%であった。

② 図4と図5は、家族構成の型といじめ・いじめられ経験の結果を示している。図の結果から、いじめた経験ありの割合は核家族の生徒に多く(47.4%),夫婦と子どもと祖父母などのいる家族の生徒に少ない(32.7%)。また、いじめられた経験ありの割合についても、核家族の生徒が42.2%と、夫婦と子どもと祖父母などのいる家族の生徒の38.8%に比べて多少多い。

すなわち、夫婦と子どもだけの核家族の生徒は、いじめをしたり、されたりする割合が夫婦と子どもと祖父母などの家族の生徒に比べて多い傾向がある。(家族構成要因といじめ経験の有無およびいじめられ経験の有無の間には統計的に有意な関連性は認められなかった)しか

し、核家族の生徒にいじめ経験やいじめられ経験が多いのではないかという指摘は、今後の研究のために参考になると思われる。

(2) 兄弟関係といじめ

① 生徒の兄弟関係で最も多いのは末子(35.1%)で、以下、長子(33.7%),ひとりっ子(19.3%),中間の子(11.9%)の順であった。

② いじめた経験ありはひとりっ子が53.8%と最も多く、以下、中間の子45.9%,末子45.1%,長子36.8%と続いている。いじめられた経験ありでもひとりっ子が53.8%と多く、中間の子41.7%,長子41.2%,末子35.2%の順である。いじめ有群、いじめられ有群に共通してひとりっ子の場合が最も多い。大阪市立大学の調査では、ひとりっ子には複数の兄弟のいる子どもに比べていじめた経験が少ない傾向を指摘している。しかし、本調査の結果は、それとは逆にひとりっ子にいじめた経験が多いことを示し、くいちがいがみられる。今後の検討課題である。

なお、教員を対象としたわれわれの調査では、「いじめられっ子になりやすい家庭環境」の第1位に「ひとりっ子」があげられ、本調査のいじめられた経験ありがひとりっ子に最も多い結果と一致している。

かつての家庭では、すでに家庭の中で、兄弟姉妹間で、「兄弟げんか」の形で自己主張もするが、我慢もするといった生活体験から社会性が培われた。ところが、核家族化、少子化された家庭では、親の過保護、過干渉が進み、子どもの自律性、対人関係スキル、学校生活や社会生活に必要なルールを身につける訓練が十分にされない傾向がみられる。そのようなひとりっ子に特有な生育環境によってもたらされる人格特性が、いじめやいじめられ経験の多さに影響していると考えられることもできよう。ただ、このような解釈の妥当性はひとりっ子の綿密な研究の裏づけが必要である。ここでは、いじめやいじめられることがひとりっ子に多い点を指摘しておきたい。

表4は兄弟関係といじめ・いじめられに関する子どもの各タイプとのクロス集計表である。4つのタイプと兄弟関係の間に有意な関連性は指摘できないが、いじめ・いじめられに直接関係しない子の割合がひとりっ子に少ない点が目につく。

(3) 母親の就業・父親の職業といじめ

① 母親のうちで職業に就いている人は61.4%,いない人37.6%である。職業に就いている母親の仕事の内容は、勤めに出る仕事55.2%,家でする仕事43.2%である。また、その仕事が常勤である場合が76.6%,パート(非常勤)が21.8%である。最近の女性の職場への進出はめざましいものがあるが、母親の手が離れる中学生をもつ

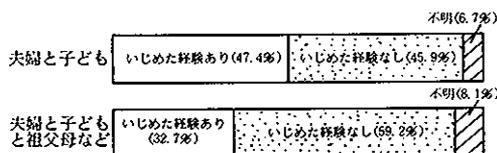


図4 家族構成といじめた経験の有無

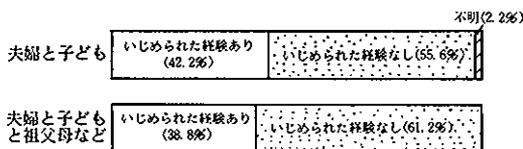


図5 家族構成といじめられた経験の有無

表4 兄弟関係といじめた経験・いじめられた経験

人数(%)

子どものタイプ	兄弟関係	一人っ子	長子	中間の子	末子	計
いじめ・いじめられに直接関係しない子		11 (28)	28 (44)	10 (43)	25 (42)	74 (40)
いじめ・いじめられっ子		14 (36)	16 (25)	8 (35)	16 (27)	54 (29)
いじめっ子		7 (18)	8 (13)	3 (13)	15 (25)	33 (18)
いじめられっ子		7 (18)	12 (18)	2 (9)	4 (6)	25 (13)
計		39 (100)	64 (100)	23 (100)	60 (100)	186 (100)

母親になると、その過半数が職業に就いているのである。ただ、父親の職業に自営業が54.6%と多いこと、また母親の仕事が家でする仕事が多いこと(43.2%)から、母親の就業には自営業を手伝う場合がかなり含まれることを考慮して以下の結果について考えたい。

② いじめた経験ありの割合は、母親の職業ありで46.8%に対して、母親の職業なしでは39.6%である(図6参照)。また、いじめられた経験ありの割合は、母親の職業ありで45.2%、母親の職業なしでは35.6%である(図7参照)。

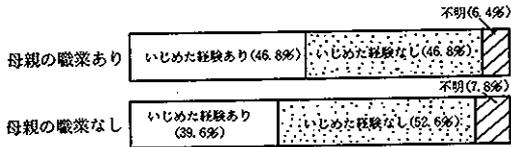


図6 母親の職業の有無といじめた経験

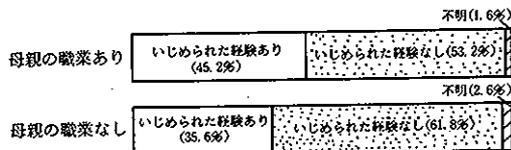


図7 母親の職業の有無といじめられた経験

以上のことから、母親が職業をもっている生徒の方がそうでない場合に比べて、いじめた経験、いじめられた経験の割合がともに大きい傾向がある。ただし、母親の職業の有無といじめ・いじめられの有意な関連性は認められなかった。また、勤めに出る仕事よりも家でする仕事をもつ母親の生徒にいじめられた経験が多かった(53.6%)。

③ 父親の職業では、自営業が54.6%と多く、勤め人39.1%、その他6.3%であった。

いじめた経験ありの割合は自営業の場合44.0%、勤め人で39.2%。いじめられた経験ありの割合は自営業で39.4%、勤め人で44.3%である。すなわち、自営業の父親を

もつ生徒は勤め人の父親をもつ生徒に比べ、いじめた経験はわずかに多く、いじめられた経験がわずかに少ない。その割合の差は小さく、父親の職業といじめとの間に統計的に有意な関連性は認められない。この結果と同様な傾向は大阪市立大学の調査においても指摘されている。それゆえ、父親の職業といじめ経験・いじめられ経験との間には明らかな関連はないと言えよう。

(4) 両親が望んでいること

どんな人間に育てて欲しいかという親の望みは、子どもの性格形成に大きな影響を及ぼすものである。ここでは、わが子に対する親の望みと、それを生徒がどう受けとめているかについて、いじめた経験の有無(表5)といじめられた経験の有無(表6)により検討した。

① 生徒に受けとめられている両親の望み

生徒が親の望みとして1位に挙げているのは、いじめ有群を除き「勉強や成績の向上」である。各群により多少順位の違いはあるが、2位以下は「生活のけじめ」「礼儀正しさ」「家の仕事の手伝い」「清潔や身の整理整頓」などが上位を占めていた。これをいじめた経験の有無でみると、有群では1位が「生活のけじめ」になっていて、無群に比べその割合はめだって高く「金銭や物を大切に使う」も多くなっていた。

いじめられた経験の有無でみると、無群が「礼儀正しさ」「清潔や身の整理整頓」「他人への思いやり」「金銭や物を大切に使う」がやや多いのに対し、有群では「我慢強さ」が多くなっており、生徒が受けとめている親の望みの内容は群間でやや差がみられた。

② 親がわが子に望むこと

一方、親がわが子に望むこととして1位に挙げたものは「生活のけじめ」であり、2位以下「他人への思いやり」「礼儀正しさ」「責任感」「自主性や独立心」などがある。生徒が上位にあげている「勉強や成績の向上」「家の仕事の手伝い」などは比較的下位にあり、生徒が下位に挙げている「他人への思いやり」「責任感」「自主性や独立心」などを親は上位に挙げていて、親がわが子

表5 いじめた経験の有無と両親が強く望んでいること

両親が望んでいること	生徒のうけとめ方		両親の望み	
	いじめ 無	いじめ 有	いじめ 無	いじめ 有
勉強や成績の向上	61.6%	60.7%	30.3%	31.5%
礼儀正しさ	47.5	49.4	54.5	65.2
生活のけじめ	45.5	61.8	70.7	70.8
家の仕事の手伝い	41.4	36.0	20.2	14.6
清潔や身の整理	40.4	34.8	32.3	33.7
他の人への思いやり	35.4	32.6	62.6	60.6
親のいっつけに従う	34.3	29.2	11.4	12.4
責任感	28.3	24.7	53.5	48.3
金銭や物を大切に	26.2	36.0	18.2	34.8
自主性・独立心	20.2	16.9	48.5	34.8
我慢強さ	19.2	18.0	26.3	25.8

表6 いじめられた経験の有無と両親が強く望んでいること

	生徒のうけとめ方		両親の望み	
	いじめられ無	いじめられ有	いじめられ無	いじめられ有
勉強や成績の向上	63.2%	60.7%	28.9%	34.5%
礼儀正しさ	51.8	44.0	64.0	53.6
生活のけじめ	50.9	54.8	71.0	69.0
清潔や身の整理	40.4	32.1	37.7	29.8
家の仕事の手伝い	40.4	40.5	22.8	14.3
他の人への思いやり	36.8	28.6	62.3	59.5
金銭や物を大切に	35.1	25.0	20.2	33.3
親のいっつけに従う素直さ	34.2	28.6	11.4	11.9
責任感	26.3	25.0	49.1	52.4
自主性・独立心	20.2	16.7	43.9	35.7
我慢強さ	14.0	21.9	21.1	32.1

に強く望んでいることと、生徒が親の望みとして受けとめていることの内容には大きな違いが見られた。これは、親側には本音とたてまえの差があり、生徒側は日頃の生活で親から注意や叱責を受けることを通して親の望みを感じとっているためであろう。このため生徒は、真に親が望んでいることを的確に受けとめていないといえる。この傾向はいじめた経験の有無・いじめられた経験の有無により大きな差はみられなかった。

### ③ 親の望みを生徒はどう感じているか

親の望みに対し生徒がそれをどのように感じ、どのような意志をもっているかについて、1) 親は望みに合わせようとして叱ることが多い、2) あなたにとって親の要求は高すぎる、3) 今のあなたと親の望みは違いが大きい、4) 親の望みにさうよう努力するつもりがある、

について5段階評定を求めた。

いじめ有群といじめられ有群は無群に比べ、自分にとって両親の要求は高すぎる、今の自分と親の望みとは違いが大きい、と感じているものがやや多く、両親の望みや期待に対し不満や葛藤をもつ傾向があり、否定的な態度をとりがちである。

### (5) 親と子どもの関わり

#### ① 小さい頃の父母の印象

生徒が父親、母親をどのような印象で受けとめているか、いじめた経験の有無(図8)いじめられた経験の有無(図9)にわけて示した。父親、母親ともに優しくかったという印象をもっているものが各群とも最も多いが、いじめ有群・いじめられ有群は無群に比べてその割合が低く、こわかった、口やかましかったと否定的な印象を

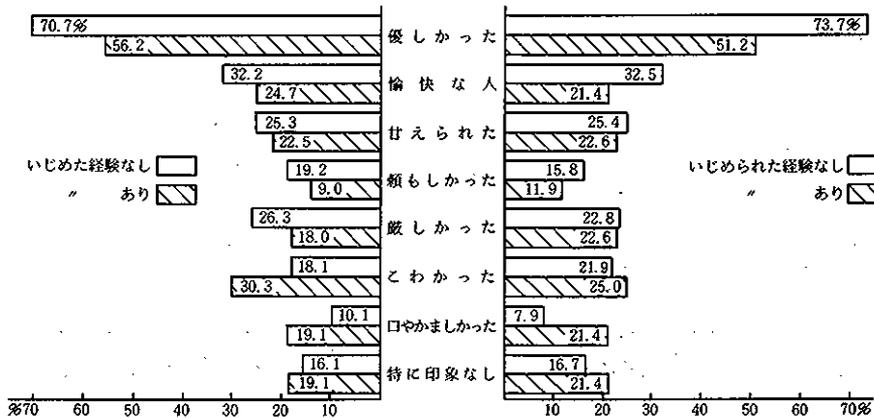


図8 いじめた経験の有無・いじめられた経験の有無と小さい頃の父の印象

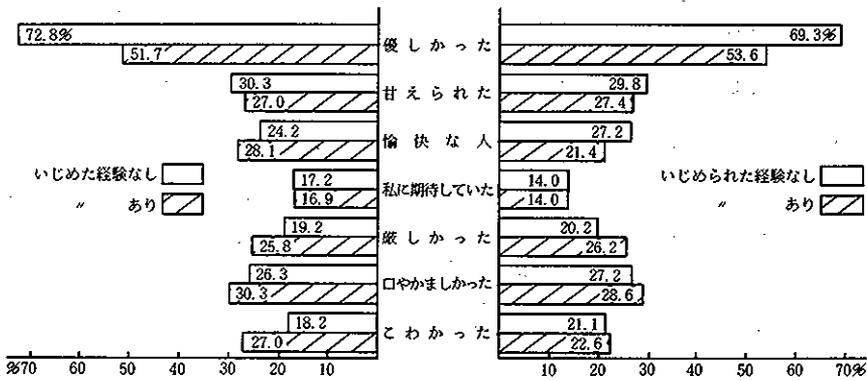


図9 いじめた経験の有無・いじめられた経験の有無と小さい頃の母の印象

もつものの割合はやや高い傾向がみられた。

② 親に小言を云われた時

父親に小言を云われた時の子どもの態度は、素直にきく40~46%、弁解する21~24%、反撥する20~24%で、群間に大きな差はないが、いじめ無群、いじめられ無群に素直にきく割合がやや多かった。母親に対しては素直にきく27~29%、弁解する31~38%、反撥する21~36%であって、父親の場合に比べ弁解、反撥の割合が高く、いじめ有群は無群に比べ反撥する割合が高かった。

③ 子どもの身辺生活

生徒が日頃、身辺生活をどの程度自らの手で行っているか15項目について3段階の自己評価を求めた。いじめ有群では、夜決まった時間に帰るものがある有意に少なく、大体決まった時間に寝る、制服や自分の衣服の手入れをするものも無群に比べ少なかった。また、いじめられ有群でも制服や自分の衣服の手入れをするものの割合が低くなっていたが、その他の項目については各群間に差はみられなかった。

(6) 家庭や家族について気になること

いじめ有群といじめられ有群には無群に比し家庭や家族について気になることや心配ごとがある生徒が多い。(いじめ有群34%、いじめられ有群43%、無群20~27%)

その内容も有群では家の狭さ、経済的なゆとりのなさなど物理的な事柄をあげ、無群では親が自分のことを理解してくれない、きょうだいと気が合わないなど、家族との人間関係について気になっていた。なお、自分の部屋がないは各群とも最も多い不満であった。

(7) いじめっ子・いじめられっ子になりやすいと思われる家庭環境

いじめっ子・いじめられっ子になりやすいと思われる家庭環境を17項目あげ、母親にその中から、5項目以内で選んで記入してもらった。教師に行った調査で同じ設問をしているので、その結果と比較検討した。

① いじめっ子になりやすいと思われる家庭環境

表7に示したように母親と教師があげた項目をみると上位3位までは同じ項目をあげている。いじめっ子にな

表7 「いじめっ子」になりやすいと思われる家庭環境

順位	1位	2位	3位
母親の回答	両親の不和 68.3%	両親の別居・離婚 67.3%	両親が不在がち 56.4%
教師の回答	同上 48.2%	同上 34.1%	同上 31.8%

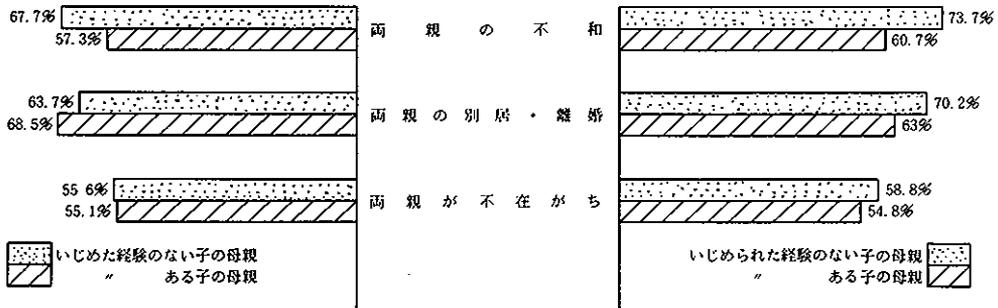


図10 「いじめっ子」になりやすいと思われる家庭環境（母親の回答）

表8 「いじめられっ子」になりやすいと思われる家庭環境

順位	1位	2位	3位
母親の回答	転居が多い 54.0%	一人っ子 35.6%	単親 31.2%
教師の回答	一人っ子 43.5%	転居が多い 22.4%	家庭内葛藤 16.5%

(注) 母親は家庭内葛藤を9位9.4%，教師は単親を5位12.9%としている。

表9 「いじめられっ子」になりやすいと思われる家庭環境（母親の回答）

順位	1位	2位	3位
いじめた経験 無	転居が多い 59.6%	単親 36.4%	一人っ子 35.4%
いじめた経験 有	転居が多い 48.3%	一人っ子 34.8%	家庭の経済状態の貧困 30.3%
いじめられた経験無	転居が多い 58.8%	単親 34.2% 両親の別居・離婚 34.2%	
いじめられた経験有	転居が多い 47.6%	一人っ子 38.1%	家庭の経済状態の貧困 28.6%

りやすい家庭環境として母親、教師とも、両親の不和及び別居、離婚、即ち両親の夫婦関係がうまくいっていないことによる子どもに対する影響をあげ、次に両親が不和及び不在がちで、子どもと両親との関係の稀薄をあげている。両親を中心とした家庭の調和をいじめっ子になりやすい家庭環境とみている。

次に母親の回答を対象児につきいじめ有群、無群、いじめられ有群、無群に分けてみると、図10に示したように第3位までに入った項目は各群とも同様であるが、い

じめ・いじめられ有群とも、全体と比較してみると1位、2位が入れ替わっている。いじめ・いじめられ有群の母親は、両親が別居、離婚とより積極的な離別を原因の第1位としてあげている。

② いじめられっ子になりやすいと思われる家庭環境

表8に示したように、母親が1位に転居が多い、2位一人っ子をあげ、教師は1位一人っ子、2位転居が多いをあげ、1位2位が逆になっている。3位に母親が単親をあげ、教師は家庭内葛藤をあげ、両者に違いがみられ

る。いじめられっ子になりやすい原因として、1人っ子があげられているが、本調査においても、全体では1人っ子が19.3%に対して、いじめられ有群では53.8%で1人っ子が多いという結果と一致する。大阪市立大での調査結果でも、1人っ子はいじめ経験が少なく、いじめられた経験が多い。また、転校経験有はいじめられ経験と強い相関をみせ、さらにいじめ経験ともかなりの負の相関をみせている。母親、教師が1人っ子、転居をいじめられっ子になりやすいと考えていることは当を得た判断といえる。

3位に母親は単親を選んでいる。母親は家族の形態や事情をいじめられる原因として考えているのに対し、教師は3位に家庭内葛藤をあげ、家族の心理的な問題にも眼を向けている点に違いがある。

(8) 家庭で母親が子どもをどのように扱い、それを子どもがどう受けとめているか

図11に示したような項目につき、母親と生徒に5段階評定をし記入してもらった。但し、年齢並みに扱われるは生徒のみに行った。各項目につき、チェックされた段階の数を掛けたものの、平均を母親と生徒別に図11に示したように意見を尊重としつげに体罰をだけ生徒の方がよい評価をし、残りは母親の方がよりよい方にチェックしている。

いじめ有、無群に分けてみると、意見を尊重して、話を聞いての項目につきよい評価をいじめ有群はしているが、あとは無群の方がよい評価をしている。母親は有群で学力について子どもにまかせている項目がよい評価をしている。これは、いじめ有群の方が子どもを受け入れ

ているように思われるが、親が子どもをしつけていないとも考えられる。

いじめられ有、無群に分けてみると生徒は話をよく聞いてくれるだけ有群がよい評価をし、あとの項目は無群の方がよい評価をしている。母親は両者に殆んど差はなく、子どもの話を聞くが僅かに有群がよい評価をし、学力についてと夫婦の考えの一致において、無群が僅かによい評価をしている。

(9) 自分の家庭や家族に対する印象

図12で示した15項目について、生徒と母親に5段階評定をして記入してもらった。その結果をチェックされた段階の数をかけて整理した。図12は生徒と母親全体の平均を示したものである。殆んどどの項目で母親の方が生徒よりよい認知をしている。但し、経済的に豊か、厳しい2項目は生徒の方が僅かながら低い評価をし、拘束が母子とも同じ評価をしている（厳しいー甘いを除けば、数が低い方がよい状態と考えられると思う）。

いじめ有、無群を比較してみると、生徒はその差は余りないが、すべての項目で無群の方がよい評価をしている。一番差のある項目は思いやりがあるでその差は0.46である。母親は両群の差は殆んどなく、4項目で無群が僅かな数が低い評価をしている。一番差がある項目は経済的に豊かで、その差は0.17である。

いじめられ有群、無群を比較してみると、生徒は無群が厳しいを除く（差は0.27）総ての項目で数が低い評価をしている。一番差がある項目は経済的に豊かで、その差は0.49である。母親は11項目が両群に差はなく、厳しい項目だけ有群が低い評価で（差は0.11）他は無群が低

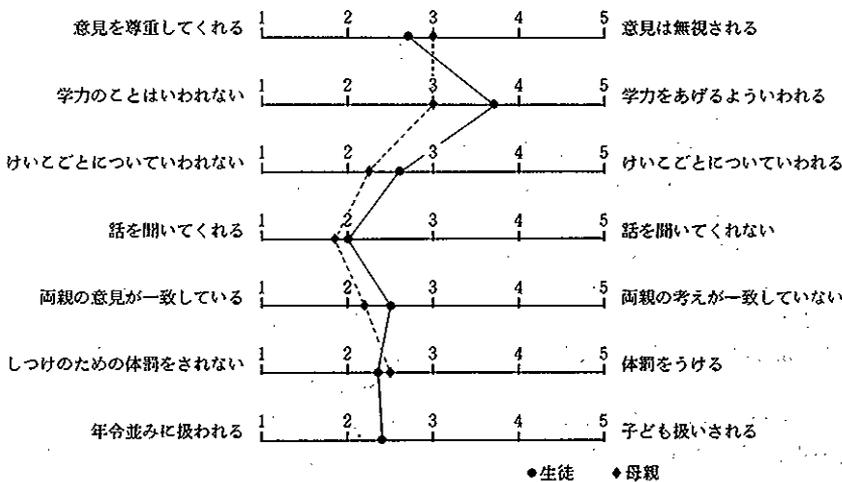


図 11

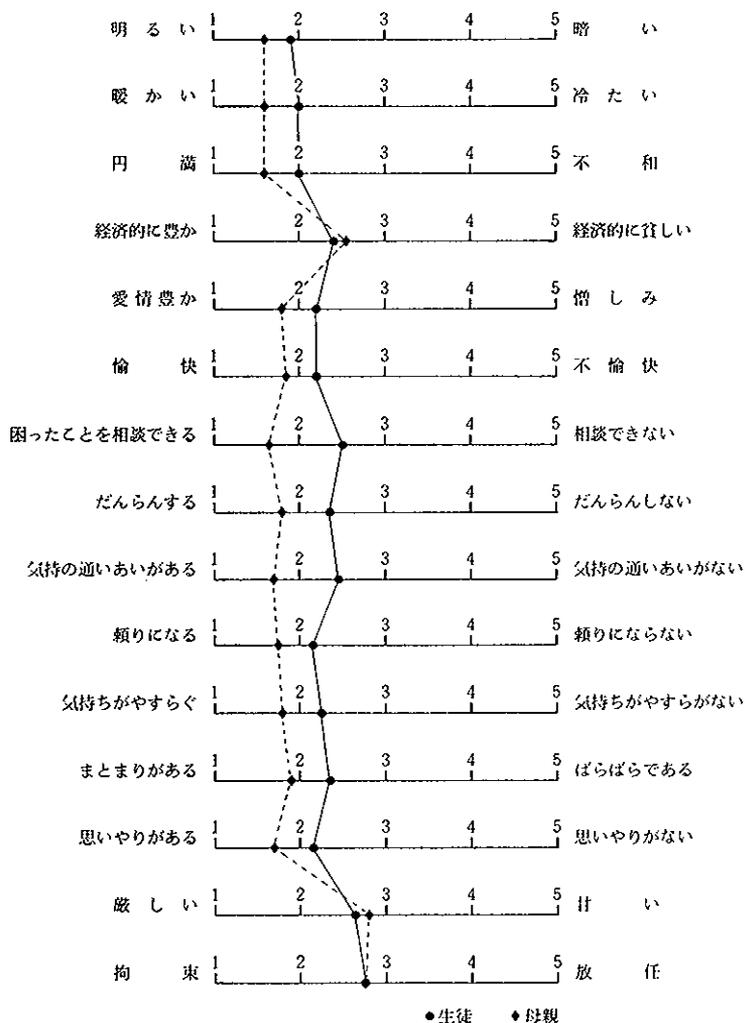


図12 自分の家庭や家族に対する印象

い評価でよい状態だと云える。

以上の結果から、生徒、母親とも自分の家庭を明るく暖かく、円満であると認知している。これは、対象が私立中学校であるためとも考えられる。いじめ有、無群、いじめられ有、無群の差は殆んどなく、両無群の方が僅かにより評価をしている。

(10) 理想の家庭とは

生徒、母親がどのようなことを家庭に求めているかを知るために、図13で示した5項目をあげ、その中から自分が理想の家庭と思う項目を生徒、母親に1項目を選んでもらった。その結果を無答欄を除き図13に示したように生徒は各群とも、1位、皆で団らんする、2位、互いに助け合う、3位、干渉し合わないを選んでいるのに対

して、母親は各群とも1位に互いに助け合うを選んでいるが、いじめ・いじめられ有群とも、2位、目標に向って、3位、皆で団らんするを選び、いじめ・いじめられ無群は、2位、皆で団らんする、3位、目標に向ってを選んでいる。無群が皆で団らんする家庭を有群は目標に向って努力する家庭をより多く望んでいる。生徒が皆で団らんする家庭を1位に選んでいる点から見て、両無群の方が生徒の考えに近いと言えよう。

全体からみると、母親と生徒(子)とでは、家庭に求める役割や機能に違いが見出せる。3位の回答にその差ははっきり現われている。子どもは親の干渉を受けず、自由にありたいと願い、また互いに助け合って、団らんに象徴される「やすらぎ」や「いこい」を求めている。

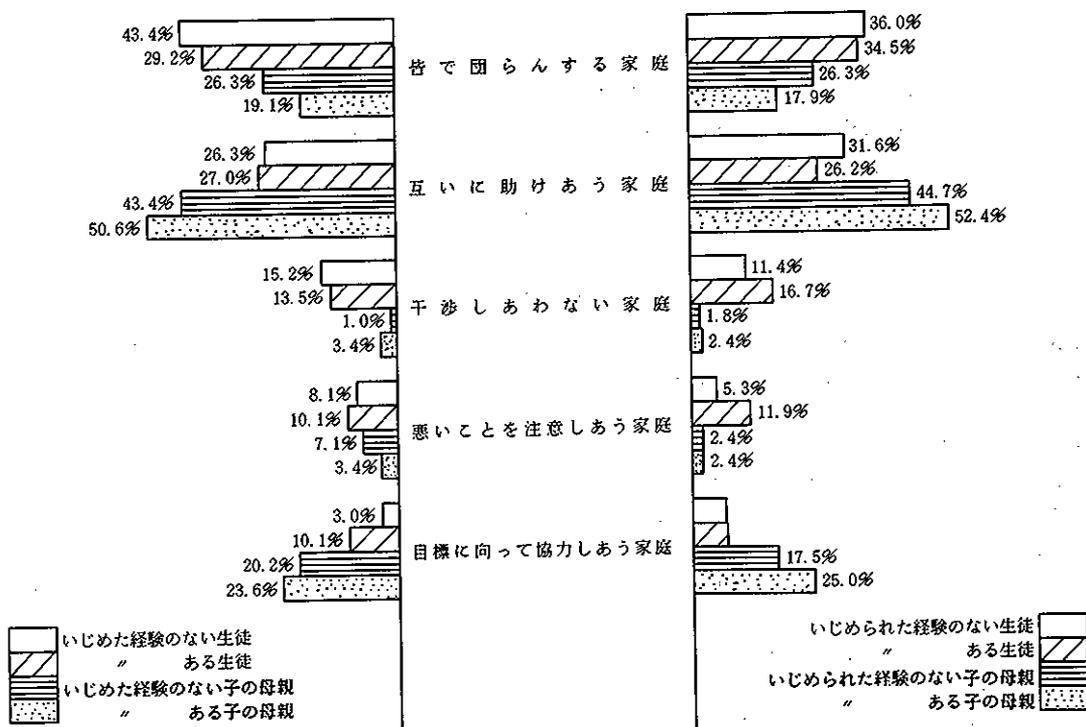


図13 理想の家庭とは

これに対して、母親は相互協力と目標達成の機能を家庭に強く求めようとしている。理想の家庭としてのイメージに母子にズレがあることは、家庭における実生活にもそれが反映し、母と子で求めることが違うのではないかと思われる。そのため、母と子で日常生活の中で意見の違いが生じることも予想できる。

本研究をすすめるにあたって、戸坂女子中・高等学校の塚本容子先生に多大なご協力を得ました。深く感謝いたします。

なお、執筆分担は、権平が3-2, の(7)~(10), 望月が3-2, の(4)~(6), 山本が3-1, の(4)~(6), 吉川が1, 2, と3-1, の(1)~(3), 及び3-2, の(1)~(3)である。

#### 引用・参考文献

1) 大阪市立大学社会学研究室, 「いじめ」集団の構造に関する社会学的研究, 1985

2) 東京都教育委員会, 「いじめ」に関する指導の手引, 1985  
 3) 徳重篤史・野崎幸雄・松尾浩也・松本良夫・村瀬嘉代子, いじめと現代社会, ジュリスト No.836 特集いじめと人権 6-21, 有斐閣, 1985  
 4) 稲村 博, いじめの心理と病理, ジュリスト No.836 特集いじめと人権 23-28, 有斐閣, 1985  
 5) 森田洋司, 学級集団における「いじめ」の構造, ジュリスト No.836 特集いじめと人権 29-35, 有斐閣, 1985  
 6) 森田洋司・詫摩武俊・野田俊作・片桐キク・三好邦雄・遠藤豊吉, いじめっ子・いじめられっ子, PHP '85/7 月臨時増刊号, PHP 研究所, 1985  
 7) 石井哲夫他, 年少非行に関する研究(第5報) 養護施設入所児の非行傾向に関する調査研究, 日本総合愛育研究所紀要第21集 137-184, 日本総合愛育研究所, 1985

## Abstract

Study of the Correlation between Home Environment  
(Upbringing Function, Parent-Child Relationship) and  
"Ijime" (bullying the weaker)Toshiko GONDAIRA, Takeko MOCHIZUKI  
Kiyoe YAMAMOTO, Masao KIKKAWA  
Mariko MURAKAMI

The purpose of the present study is to explore the correlation between home environment and ijime by questionnaire. The matters of the questionnaire consist of the actual conditions of ijime, opinions about ijime, home life, parent-child relationship, school life and others. The subjects were 221 private junior high school girls and 221 of their mothers.

Our findings did not indicate significant correlation between home environment and ijime, but made clear several conditions and backgrounds connected with ijime. That is to say, in the matter of school girls themselves and their school lives, some differences were shown between the bully and bullied school group and non-bully and non-bullied school girl group. The followings are the distinctions found in the bully and bullied school girl group;

- 1) Most girls rate their own behaviors and charactes low
- 2) Most girls were difficult children in their infancy
- 3) Most girls have experienced change of schools
- 4) Most girls have something to worry about in their school lives

In the matter of home, family and parent, the following distinctions were found in the bully and bullied school girl group;

- 1) Nuclear family
- 2) Only child
- 3) Most mothers engage in occupations
- 4) Most girls got bad impressions of their parents in their childhood
- 5) Most girls have the feelings that their parents expect too much from them
- 6) Most girls rate their own families and homes low
- 7) Most girls have something to worry about in their home lives

## ファミリークリニックのあり方に関する研究

神田 久男 (母子愛育会心理治療室)  
 権平 俊子 (研究第6部)  
 山本 清恵 (母子愛育会心理治療室)  
 稗田 涼子 (同)  
 加藤 博仁 (愛育病院)

### 1. 目的

当研究所における児童及び家庭養育機能の健全な発達  
 の促進に関する研究の一環として、家族関係や家族内問  
 題の調整等、いわゆるファミリークリニックを実践する  
 にあたり、現代の日本の家族に適用できるような効果的  
 かつ実践的な治療理論や技法を開発することが本研究の  
 目的である。初年度である今回は、変化しつつある現代  
 日本の家族の特徴を分析するとともに、欧米や日本です  
 べて研究・実践されている家族療法をもふまえながら、  
 当研究所でのファミリークリニックのあり方や具体的な  
 方向性を検討する。

### 2. 現代日本の家族の特徴と問題

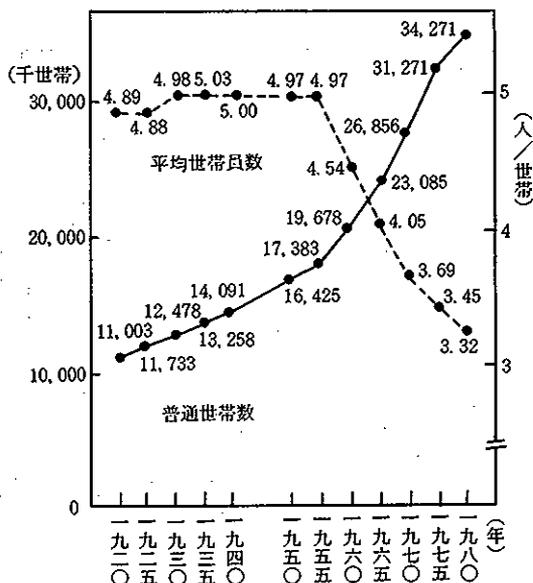
文化的・社会的に急激な変化を経験しつつある我が国  
 の家族について、その特徴と問題点を最近のデータに基  
 づいていくつかの側面から考察する(基礎資料とした主  
 なデータは後に記載)。

#### ① 核家族の増加と小家族制

戦後の経済成長や人口の都市集中などに伴い、日本の  
 家族は核家族化の様相を呈していると言われて久しい。  
 昭和30年の統計では、世帯総数1,728万の内、拡大家族  
 643万(37.2%)、核家族1,035万(59.9%)、単独世帯50  
 万(2.9%)であるのに対し、昭和55年は世帯総数3,409  
 万、拡大家族711万(20.9%)、核家族2,160万(63.4%)  
 単独世帯538万(15.8%)と、核家族と単独世帯の増加  
 は著しい。ことに第2次、第3次産業への就業者が急増  
 し、多くの者は家族集団とは別の集団に所属して仕事  
 をすることになるが、その結果父親にとって“いえ”は休  
 息の場としての意味合いが強くなり、従来の家父長制的

家族制度は構造的にも弱まりつつあると言えよう。

一方、出生率の推移をみると、昭和22年頃の第1次ベ  
 ビーブームでは、人口千人対約30人前後であったが、昭  
 和36年には16.9人と一時的に減少。昭和46~48年(第2  
 次ベビーブーム)に再び19人以上を記録してはいるもの  
 の、昭和55年には13.6人にまで下がっている。これは連  
 動して、平均世帯人数も昭和35年頃より急激に減少し、  
 昭和55年以降は一家族平均3.3人を割り、三世代家族(大  
 家族制)から二世帯家族(小家族制)へと変化している  
 ことがわかる。しかもこの傾向は、大都市の自営業者、  
 サラリーマン家庭に顕著である(図1)。



資料：総理府統計局「国勢調査」(袖井孝子,1984)

図1 普通世帯数および平均世帯員数の推移

② 離婚と働く女性の増加

夫婦の離婚件数はここ2～3年やや停滞はしているものの、あいかわらず高い数を示している。人口千人に対する離婚率は昭和35年が0.76人であったが、昭和58年までには1.51人と倍増し、なかでも30歳以上の中高年の離婚が増えているのが特徴である。さらに、働く女性については、全就業者数に占める女子就業者の割合をみると、昭和55年度は38.7%であり、その内の約8割が既婚女性ということで、主婦の職場進出の傾向はかなり高まっている。

こうした点から、日本の家族の構造や機能も当然変化していることが予想される。日本の小学5～6年生を対象にした調査では、朝食を1人でとる子供は39%もいるという結果がでていてなど、一面では父や母の家庭内不在、親子の接触時間の短縮といった物理的な問題が注目されるわけであるが、現実には夫婦関係や親子関係そのものの質の変化が起きていることにも十分な配慮が必要になってくる。

③ ライフ・サイクルの変化と老後問題

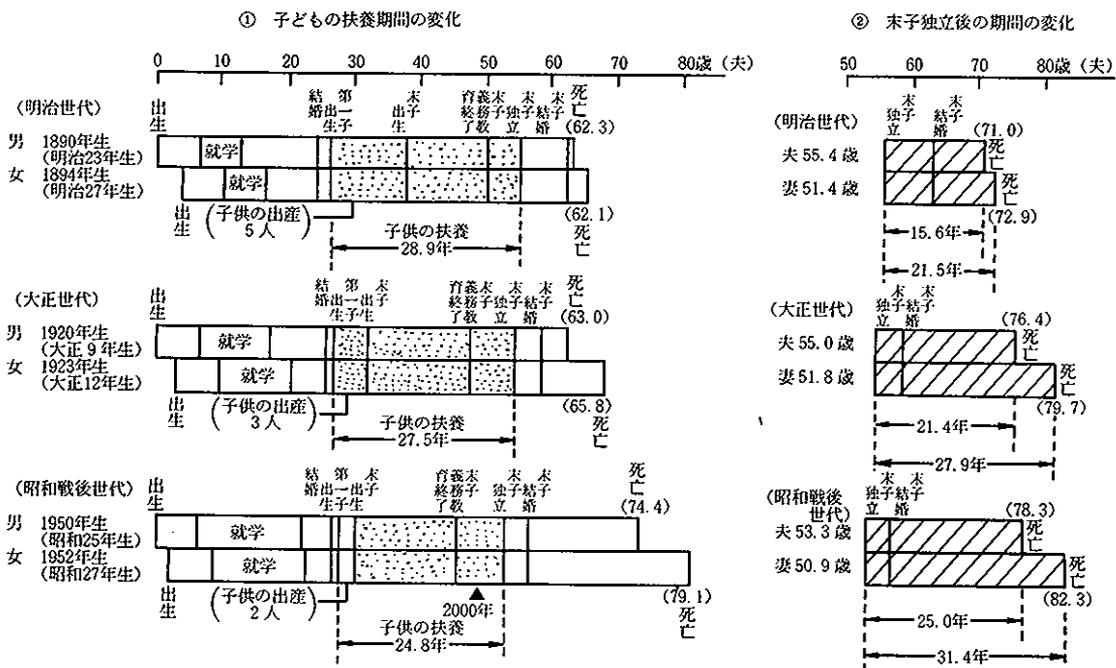
日本人のライフ・サイクルを大きく変えた要因の1つは、高学歴に伴い就学期間が延長され、男女の結婚年

齢が遅くなったことがあげられよう。これは同時に、その家族における長子出生の年齢も遅くなっていることを意味している。一方、出生率は逆に減少しているために、末子出生の年齢は早まり、それだけ子育てに要する期間は短縮され、主婦の再就職も可能な状況が生まれていることになる(図2)。

また、平均寿命が延び、長い老後を迎える人が増えているが、ことに女性の独り暮らしの老人が増えていることは、老人問題を一層深刻なものにしている。65歳以上の高齢者をかかえている世帯は、全世帯の24%と予想以上に高く、それだけ家族関係は複雑になり、軋轢も多くなっていることが予想される。家族内相互関係の調整は、老人の生きがいの問題と共に今後の重要な課題である。

④ 家族機能・家族関係

まず、個人にとって家族は何を意味するかということについて、欧米諸国と日本を比べると、日本では「同一の家系に属する集まり」「血縁で結ばれた集まり」と、家族を「いえ」という枠組(制度)のなかで血縁によって結ばれたものとしてとらえようとする傾向が依然として強いことがわかる。これに対し欧米では、あくまでも個を基盤とし、家族員一人一人が愛情で結ばれ、相互扶



原生省統計情報部「人口動態統計」「生命表」および厚生省人口問題研究所「出産力調査」により作成。(袖井孝子, 1984)

図2 世代別にみたライフサイクルの変化

養育のための集まりであると考えている者が多いことは言うまでもない(図3)。

つぎに、家庭運営面では、6割以上が自分の家庭を“話し合い型”であると認知し、ものごとは家族員で話し合っていて決めていると考えている。ただ、子育ての時期だけは“リーダー型”の家庭が一時的に増加しているのが特徴である。内容的には、子育ての時期である30~40歳代の男性は、30~40%まで夫(自分)がリーダーシップをとっていると考えているが、この時期、妻からみて夫がリーダーシップをとっていると考えているのは20%前後しかないなど、家庭運営面に対して夫婦間に認知のズレがあることがわかる(図4)。

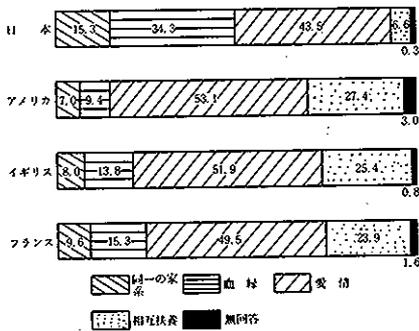


図3 家族のイメージ(総理府)

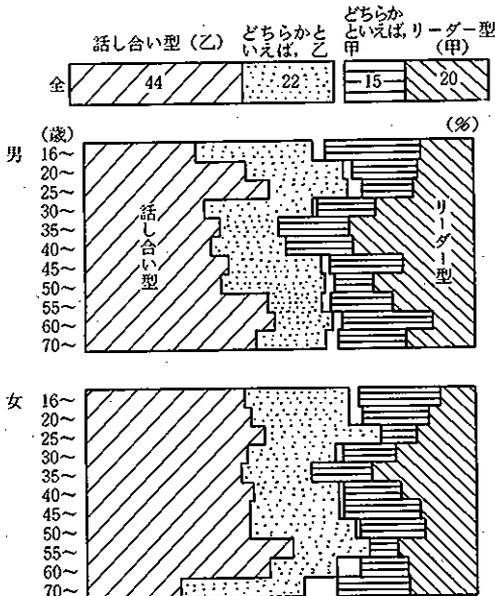


図4 ものごとの決め方(NHK)

また、家庭が日常生活のよりどころになっているかについては、子育て前期では積極的に肯定する者の割合は妻の方が高い(夫:33%,妻:37%)。ところが、子育て後期・以降になるとこの傾向は逆転し、年齢と共に夫の家庭依存は強まる傾向にある(子育て後期・夫:42%,妻:37%,子育て期以降・夫:49%,妻:41%)。

さらに、夫婦関係そのものについてみると、互いに信頼し気持が通じ合っていると肯定的に評価する者の割合の推移は、男性は年齢と共に増加する傾向(53%~76%)にあるが、女性はそれほど増えていない(51%~62%)。反対に、夫婦関係の否定的評価の割合は、男女間に差がない子育て前期に比べ、子育て後期では妻の否定的評価は夫を上回り、この傾向は子育て期以降にまで引き継がれている(夫:12%,妻:19%)。

こうした諸傾向を総合すると、これまで一般に認められていたイメージとは異なり、ことに女性(妻)の家族や自分の生き方に対する意識は確実に変化してきていることがわかる。

(注) この考察の基礎とした主な資料は以下の通り

- 厚生省(厚生統計協会)「厚生行政基礎調査報告」昭和60年
- 総理府青少年対策本部「国際比較 青少年と家族」昭和57年  
サンプル:各国共0~15歳の子をもつ親、約1,000人
- NHK世論調査部「現代の家族」調査 昭和60年  
サンプル:全国の16歳以上の男女3,600名  
個人面接法
- 国勢調査(総理府)

### 3. 家族療法の展望

現在の日本における家族療法に多くの影響を与えた米国を中心とした理論、及びすでに日本で実践されている家族療法の中から、その主要なものについて、われわれが研修や見学等によって得た知見をも参考にしながら、それらの“家族療法をとらえる視点”や“治療技法の特徴”などを中心に考察する。

#### ① アッカーマン(Ackermann, N.W.)等の精神力動論

基本的には精神分析を背景にはいるものの、個人ではなく、心理・社会的な1つの有機体である家族全体を診断、治療の一単位とみなしている。そして、「精神内界の諸過程と社会に参与する諸過程のかけ橋」として

各家族員の社会的役割を重視し、その家族内での役割関係が精神力動に重要な意味をもつことに注目した。家族ホメオスタシスの観点からすると、本来家族的役割関係には、家族員相互に感情や欲求を充たし合う関係（積極的相補性）や、葛藤や不安のもつ破壊的影響力を和らげ、家族員のなかで弱い状況にある個人に問題が顕在化してしまうのを防ごうとする関係（消極的相補性）などがあるが、家族の健康が損なわれるのは、この相補的な役割関係が崩れるためであるとしている。

そこで家族に健康な相補性を回復させるために、治療者は欲求や感情、価値観などに対する家族員相互の認知のズレや目標のくい違い、さらには不自然な役割期待などを修正させるように積極的に介入し、家族員相互が承認し合えるような適切な役割を担えるように転換をはかることになる。

### ② システム論的アプローチ

家族療法に関する理論と技術は、今日までに数多く生まれている。リッツ (Lidz, T) やウィン (Wynne, L) 等による精神分裂病の家族研究から得られた知見は、現在の家族療法に多大の影響を与えてきたことはまちがいない。ところが近年、これらはおしなべてフォン・ベルタランフィ (Von, Bertalanffy, L) の一般システム理論のもとに理論の統一がはかられ、それぞれの理論はこの中に位置づけられるようになってきた。

フォン・ベルタランフィは、生物体システムは開放システムであると考えた。開放システムとは常に他のシステムと交流をもち、相互に影響し合うシステムのことである。他のシステムとは関係をもたず、それ自体で独立している閉鎖システムとは異なる。家族にみられるのはまさにこの開放システムであり、各部分は相互依存的に関係し、相互作用をくり返していくとともに、そのシステムは1つの全体としてのまとまりや統一性を維持しているのである。したがって、この考え方からすると、家族はいくつかの有機的に結びつくサブ・システム、つまり家族員から構成されている1つのまとまりをもったシステムであるということになる。治療とは、家族というシステムの内に存在する相互作用のパターンに介入してそのシステムを変容させ、何らかの修正をはかることにほかならない。

システム論的アプローチによる家族療法的前提になっている考え方を、鈴木浩二は以下のようにまとめている。

1) 家族は個々の家族員を総和した以上のものである：したがって、複雑な相互関係から成る家族から、問題となっている個人1人だけをとり出して理解しようとしても、問題の本質をとらえることはむずかしい。

2) 家族はそれ自体の平衡を維持し、発展するものである：家族内の相互関係が緊張の極に達した時、もう一度平衡をとりもどそうとする力が働くが、平衡を回復した家族は以前よりも機能的で発展した状態にある。また、1人の家族員の問題行動や症状は、その家族全体の機能不全の現われであり、同時にこれは、その家族に平衡を回復しようとする力が働いている証拠ともいえる。

3) 家族システムは連鎖的、循環的な相互作用の構造をなしているため、個人の変化は家族全体の変化を、また逆に、全体の変化は個人の変化をもたらす。

4) 家族にはホメオスタシスを維持するために規則が存在する：たとえば、“家族神話”などはそのよい例である。現実からかけ離れた家族神話をもった家族では、家族員は互いに親密に結びつき、家族内は平穏であっても、外界に対しては閉じられていて、個々人の自由な自己表現は抑えられているため、自律性の確立は疎外されてしまう。

以上が家族をシステムとしてみる家族療法に共通した前提となっている考え方の概要である。家族システムのどの点を重視し強調するかは、各派あるいは臨床家個人によって違いが認められるが、以下③～⑥は広義にはこのシステム論的アプローチによる諸派として位置づけられよう。

### ③ ボーエン (Bowen, M) の家族システム理論

システムの3属性のうち、“分化（発達）”に焦点を当てた理論で、家族精神力動論ともいえる。したがって、家族というシステムの要素（家族員：サブ・システム）が全体から分化し、再びよりよい統合を形成していく過程を重視する。たとえば、理性と情緒が未分化で融合している母親は、強い不安を抱き、子どもを巻き込んで共生的に結びつき、同時に父親を疎外するなど、さまざまな“三角構造”をつくりやすい。しかも本人の不安は、子どもやその家族だけではなく、多世代を含む家族にも拡大されることになる（多世代伝承過程）。

そこで治療は、この家族を中心に多世代にわたる拡大家族について、家族歴を詳細に検討することから始められる。さらにはそうした三角構造を解きほぐすことにより、各成員がより高い自己の分化の水準へ向かえるように援助すること、つまり家族員の個性化・自律性を促進させることが治療の目的になっている。

### ④ ミニューチン (Minuchin, S) の家族構造療法

システムの“構造”を重視した理論で、家族の構造を中心に改善することにより、個人が社会や環境との相互作用で経験するそのあり方を変化させ、適切な機能性が発揮できるようにすることにウェイトが置かれる。機能

的に障害のある家族としては、家族員間の連合が強すぎたり柔軟性に欠けるもの、あるいは家族員間の境界線が不明瞭であったり世代境界が崩壊した家族、それに偏った勢力構造などがあげられよう。

ミニューチンの治療の基本は、個性化の保護と相互性の支持にある。前者は家族員それぞれのアイデンティティを明確にする境界を保護することであり、後者は変化が必要な特定の家族員とは相補の関係にある他の家族員に、その変化を助けるように指示することである。したがって、治療場面では、家族員にその家族の交流パターンや過去の出来事を実際に再現させたり、次回までの宿題を与えるなど、指示的でアクティブでもある。

⑤ コミュニケーション派

カリフォルニアのMRI(Mental Research Institute)を拠点とするこのグループは、パロ・アルト派とも総称されるもので、基本的には家族員間におけるコミュニケーションのあり方に着目している。すなわち、家族システムの特徴を理解する手がかりとして、その家族内にみられる成員間相互のコミュニケーションの様式に関心が向けられ、そこから問題となる相互作用のパターンをとらえようとするもので、いわばシステムの“機能”という属性を重視したアプローチといえる。

ベーツォン(Bateson, G)等の二重拘束説で論じられているように、コミュニケーションには普通ことばで表現された“内容レベル”のものと、その内容を規定する“関係レベル”のものがある。声の調子や表情、身振りなど、“関係レベル”のコミュニケーションは、発せられたことばの本来の意味を規定する高次のコミュニケーション(メタ・コミュニケーション)であるが、両レベル間にはしばしば矛盾や不一致が生ずることがあり、その結果、家族員間の相互関係は必要以上に複雑になり、歪んだものになってしまう。したがって治療の主眼は、メタ・コミュニケーションを中心にその家族内で循環的に反復されている歪んだコミュニケーションを浮き彫りにするとともに、積極的に介入して明確なコミュニケーションがとれるように働きかけていくことに置かれている。

⑥ 戦略派

コミュニケーション派から発展したもので、まずすべてのコミュニケーションは、相手との関係の性質を規定する営みであると考え、人は関係の規定をコントロールするために争うのであり、もしそのことに失敗すると、最後の手段として症状をもち出すことになる。つまり、症状というのは家族員相互の関係で、本人が主導権を握るための比喻であるとみなしている。この症状という比

喩を使つてのコミュニケーションは、何度かくり返されていくうちに固定化される性質をもつ。したがって、このような症状という比喩を適切なものに移すには、比喩を使ったコミュニケーションの連鎖を変えることが必要になるわけで、それが結果的には家族のシステムを変化させることになる。

具体的な治療法としては、治療者が直接指示したり介入したりするものが多く、具体的で実用的でもある。たとえば、症状に肯定的なラベル・枠組・意味を与えたり、その症状行動をあえて実行させることで、逆にその症状行動をコントロールできるようにするといった逆説的アプローチは代表的な技法と言えよう。

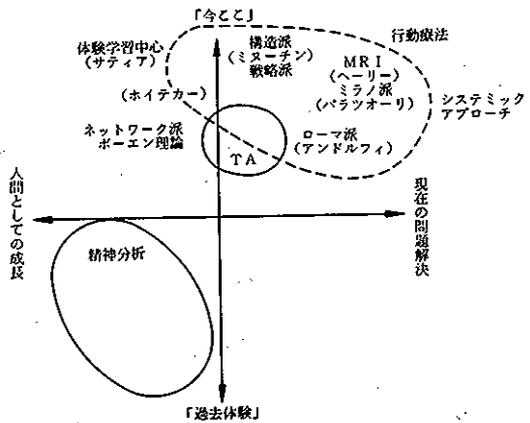


図5 各派の位置づけ (国谷, 1982)

⑦ 淀屋橋心理療法センター

ミニューチンの理論を基礎に昭和58年に開設された。幼児とのプレイ場面で母親と面接することなどもあり、個々の事例に則して他のシステム的な技法も適宜用いられている。主な相談内容は登校拒否、家庭内暴力、強迫神経症といった思春期・青年期の問題が多く、3ヶ月～6ヶ月(週1回、事例によっては多くなることもある)を治療期間の一応の目安にしている。また、学校の教師やカウンセラー、親などを対象にした講演会を数多く開催するなど、地域との連携をはかり、その活動範囲は広い。

⑧ 国立精神衛生研究所

システムズ・アプローチを背景に、また事例によっては特に家族構造療法を適用して家族療法を実践している。申し込み者に対しては、家族全員で来所することを原則とし、初回面接で家族療法が適当と判断したら、一応10回(月1回)を1セッションと考えて治療契約を結ぶことが多い。

家族と直接接する治療者と、観察室で治療過程を見守っている治療者との間には、常に卒直な意見交換がなされ、スタッフ間の協力体制はかなり確立されている。治療の今後の方針や次回までに家族がなすべき課題だけではなく、家族からの電話や手紙による問合わせに対しては、スタッフ一同で協議をし、そこで得られたコンセンサスとしてその家族に伝えられている。

#### 4. 概 括

我が国における“いえ”制度は、何世代にもつながったタテの関係を重視する家父長制が伝統である。本質的に日本に強い父性が厳然として存在していたかどうかは別として、そこでは家長である父親に大きな力と責任が与えられていた。そして、他の成員はそのもとでまとまり、それぞれが家族内で自分の位置や役割を担っていたといえる。こうした大家族制では、何らかの理由で家長（父親）が不在になった場合でも、その代理は常に存在し、祖父母や叔父母などがその機能を代行することは可能であった。

一方、核家族というのは、本来父と母という非血縁的なヨコの結びつきが主軸になっている。したがって、このような結びつきは、それだけ各成員の個性や主体性が発揮されやすい構造をもっているといえよう。ところが日本の核家族は、従来の家族制の影響を強く受けていて、夫婦中心というよりは、依然として親子中心（タテの関係）であるために、夫婦連合が確立されていなかったり、母と子の結びつきが強すぎたりする傾向が認められる。

また、社会の急激な変化に伴い、価値観や規範、さらには生活形態なども変化し、父親（母親）は家族以外の社会的集団にも所属し、そこでも生活のウェイトをかなりかけることになる。その結果、父親（母親）が家庭にあって不変の地位を保ち、父性的（母性的）な役割を遂行することは難しい状況になっているといえよう。

ことに日本の家族の特徴として、従来から指摘されている構造の1つは、核家族化が住居の小規模化、家族員の減少、家事労働の軽減をもたらし、母親の余った時間とエネルギーはいきおい子どもに向けられ、母と子の密着した世界が形成されやすくなっているということである。家庭にあって子どもはいつでも王様で、ときには父親と息子の位置関係が逆転してしまっている家族すら見られる。母親が子どもにかかりきりになり、手のゆ

きとどいた世話をすることは、ともすれば過保護に陥りやすく、それだけ子どもの親や家族からの自立が遅れることは、今さら言うまでもない。ところが、さらに問題なのは、そのような家族の状況に対して、父親は批判や苦情も言わず、むしろそれに甘んじているために、問題がはっきりと顕在化してこない限り、その家族は一見まとまりをもって、毎日の生活は平穏に営まれていくことになる。

このように考えてくると、家族の各成員の個性や自立的な生き方を認めることが前提になっている欧米の家族に対し、家族を一つのまとまりをもつ全体としてとらえるシステム論的アプローチがかなり有効であることはわかる。しかし、岡堂の指摘にもあるように、各成員の個性よりは、家族全体のまとまりや平衡の維持を優先させている日本の家族に対して、この理論をそのまま適用することは、かえって各成員の独自性を見失わせることにもなりかねないので、慎重な配慮が必要となるであろう。

当研究所では、幸いにして、子どもの出生から、その発育過程を追跡してとらえることを目的としたシステムを備えている。そこで、こうした特徴を生かし、夫婦間に子どもが誕生してから、その家族の構造や機能がいかに変容していくかを縦断的にとらえることにより、家族員間の役割や境界が不明瞭な日本の家族に特有な力動関係をより具体的に把握することができると考える。したがって、これまでの心理治療から得られた家族に関するさまざまな知見をもとに、このような発達家族的アプローチをも加えることにより、日本の家族の特質に対応できるような理論や技法を発展させていくことが、われわれの今後の課題でもある。

#### 文 献

- 1) 鈴木浩二「家族療法の理論と実際」季刊精神療法 Vol.8 No.2 1982 金剛出版
- 2) 袖井孝子「老後の介護はどこまで」(ゆれ動く現代家族)日本放送出版協会 1984
- 3) 岡堂哲雄「家族への心理的援助」家族心理学年報1 金子書房 1983
- 4) 国谷誠朗「家族療法の実際」精神分析と家族精神医学の実際(その1) メディカル・アカデミー 1982

Abstract

Study on the Stand of Family Clinic

Hisao KANDA, Toshiko GONDAIRA  
Kiyoe YAMAMOTO, Ryoko HIEDA  
Hirohito KATO

The present study is a part of the study on promoting the sound development of children and family upbringing function.

This year, we particularly made the elementary study for developing the effective and practical therapeutic theory and technique applicable to modern Japanese families preceding the practice of Family Clinic.

Concretely, in the first half, we examined from several sides, based on the recent data, the characteristics and points at issue of the Japanese families which are undergoing sudden cultural and social changes.

On the other hand, in the second half, we groped for the theory and technique which can correspond to the specific characters of Japanese families by investigating chiefly the theories in Europe and America which have had influences on the family therapy in Japan.